

住む人の 想いを カタチに 込めて

素朴な問いかけ
誰のためのまちづくりか

ずっと暮らすまちのことだから、
住む人の気持ちが伝わってほしい。
つくる側もまた、使う人に喜んでほしい。
ならば、じかに想いを交わしてみるといい。
するとほら、
見えなかったものが見えてきた。

まちは人が集まってできている

竹下地区を中心に地元有志によって発行されるタウン誌「ふれあい」。その第34号では、「水と在るまち」と題し、那珂川やそこに架かる橋などに触れるかたちで「りほんシテイオ那珂川」のプロジェクトを取り上げた。また、平成9年の秋に発足した「まちづくりの会」の、竹下駅西口における住民と行政が力を合わせた再開発への構築にも触れている。地域住民のまちづくりへの関心や参加意欲は、当地に限らず年々強くなっている。本来、何世代にもわたって暮らしていくわがまちの行く末が気にならないはずがない。そして、それが記憶の奥底につながる風景にまで関わるとなればなおさらだろう。



「りほんシテイオ那珂川」では、地域に関わりの深い住民や学識経験者などをメンバーに招き、「りほんシテイオ那珂川まちづくり委員会」を開催、積極的に意見を吸収する予定である。平成9年度に試験的に行った意見聴取会でも、ティベロツパーや行政が見通しがちな課題やアイデアが多く出されている。まちは単に建物や道路が集まることができるのではなく、それは人々の喜怒哀楽がびっしり詰まった共同体なのだ。耳を傾ければ、それまで見えなかったものも見えてくる。

福岡市民のこころの故郷をつくる

「りほんシテイオ那珂川」は、日一日と現実のものとなつていく。だが、さらに魅力的な景観と住環境をつくるために、行政が行司役となつて民間事業者や住民の方々と力を合わせたまちづくりの推進がいつそう大切にな



「アーベインリビエ清水」完成予想図



「パロス・リバーコート博多図書館」のオープンスペース



美野島南公園

る。福岡市では、今後はこのまちの景観づくりについて住民との意見交換を行いながら、景観形成地区指定など長い年月をかけたまちづくりの基本となるルールづくりにむけた話し合いをスタートさせたいと考えている。春の風に舞う桜の花びら。河畔に木陰をつくるエノキ並木。鎮守の社を抱く神社。忘れられていた川が周囲の風景とともによみがえり、そこに笑顔と歓声に彩られた老若男女が集い願う。21世紀、このまちが福岡市民のこころの故郷となるように。「りほんシテイオ那珂川」、物語の第一項はめくられたばかりだ。